

緩和ケアについて

緩和ケア長 徳岡泰紀

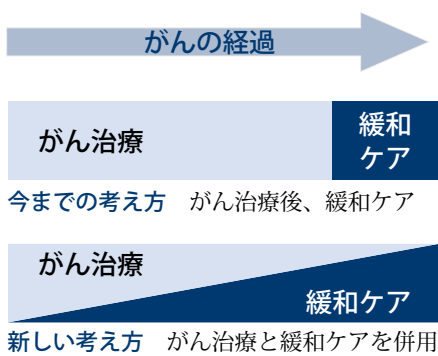
緩和ケア病棟では患者さんの苦痛に対して、全人的な緩和ケアを行っています。がん患者さんの苦痛は単に身体的な問題にとどまらず、精神的苦痛、心理・社会的苦痛などのさまざまな苦痛が存在します。これに対し、医師や看護師、心理士など多くのスタッフが協力し、患者さんがその人らしく生きていけるように、チームの力でサポートしています。

緩和ケアというと、みどりの医療や終末期医療と考えられることが多いようです。確かに以前は、緩和ケアとは治癒を目指した治療が有効でなくなつたときのみ行われるケアと考えられていました。

しかし、最近になりその考えは変わってきています。WHO（世界保健機関）の定義（2002年）では、緩和ケアとは、「がんなどの生命をおびやかす病に直面している患者さんの苦痛に対して、病気の時期を問わず早期から提供され、患者さんのみならず家族も一緒に支えていくもの」と定義されています。また最近の論文では、

緩和医療を行いつなががん治療を行うほうが、緩和医療を行わずにがん治療を行うよりも余命が延長される、といったデータも出ています。緩和ケアは終末期を支えるだけでなく、患者さんのさまざまな病気の時期における苦痛を支え、患者さんがその人らしく生きていけるように援助する医療なのです。当院では年に1度、医療者向けに緩和ケアの研修会を開催し、緩和ケアの普及に力を入れています。緩和ケアの本当の理念が広がり、がんになった多くの患者さんの苦痛が緩和されていくことを願っています。

がん治療と緩和ケアの関係



町長日記

参議院議員選挙

Vol. 42

この原稿を書いているのは7月8日である。4日の参議院議員選挙公示後、初の週末を迎え盛り上がりつつある。と書きたいが、お世辞にも盛り上がりつつあるとは言い難い。維新の会の候補者が選挙区、比例代表とも出馬辞退したことも影響しているのかもしれない。

元来、参院選は衆院選ほど盛り上がりがない。事実投票率も衆院選を上回ったことがない。候補者の知名度のなさ、一度当選すると6年間見かけないといった親近感の薄さも手伝ったことだろう。もう一つの要因は衆院選と参院選の性格の違いである。衆院選は直接、政権与党を選び新首相の選出する政権選択選挙である。一方参院選は政権選択とは直接関係なく、もし自公政権が過半数に達しなくても自公政権は存続し続けるだろう。これだけ関心が低いと、参議院不要論まで出てきそうだが、本来参議院は良識の府として、衆議院とは違った角度からの考察を加え、政権に対するチェック機能が期待されている。しかるに選挙前の通常国会会期末のどたばた劇はなんだったのか。ろくすっぽ審議もせず、重要法案の採択を放棄、首相に対する問責決議の可決、挙げ句の果てに国会閉会で法案は廃案に



町長 田原本 寺田 典弘

追い込まれた。参議院は重要な任務、責任を果たしていない。これでは衆参とも議員定数の大幅削減論が出てくる。定数削減が当然のように語られている。私の友人に衆議院で2期目を務める男がいる。彼に一日のスケジュールを見せてもらったが、各委員会、各省庁打ち合わせ、勉強会など朝6時から20時までほぼ30分刻みに入っていた。こんな状況でこれ以上定数を減らすと言うことは、今まで以上に各委員会を掛け持ちするということ、自分の意見考えを整理し、まとめる時間すらなくなる。これでは委員会に出ても自分の意見ではなく、官僚の作文を読むだけになると嘆いていた。いずれにしても、この広報が発行されるころには、参議院議員選挙の結果がでている。ねじれ状態が解消し安倍総理が政策的信念を貫きやすくなるのか、それとも解消されずまたもや政局に利用され続けていくのだろうか。